



マキタ設計 事務所社長 蒔田 英士氏

まきた・えいじ 1983年1月14日生まれの42歳。2005年3月に東海大工学部情報システム学科を卒業。不動産会社などを経て、14年にマキタ設計に入社。営業部長や専務などを経て4月から現職。

「何から取り組むか。限り業務効率化を進め、社員9人という少ない人数だからこそ、可能な社長は、オーナーの事業化判断のため、図面をはじめ、相談や提案へのレスポンスを早くすること、心掛けていた。設計者には「作りたいモノをいかに早く可視化するか」

INTERVIEW

DX推進で事業拡大へ

マキタ設計事務所(本社・札幌)は、商業施設やオフィスビルの意匠設計を得意とする。近年は工場や物流施設の設計を手掛け、存在感を強めている。4月に就任した蒔田英士(42)社長は、AIなどの新技術活用といったデジタルトランスフォーメーション(DX)を推進し、事業拡大を目指す構えだ。今後の経営方針を聞いた。

(経済産業部 坂本健次郎)

工場や物流施設手掛け 迅速な対応が信頼関係に

が求められる。その考えを引き継ぎ、加速するために作成AIやBIM、GISなどデジタルツールの導入している。疑問や要望を丹念にスピード感を持って応えることが信頼につながると思う。

―得意な仕事、強みは。創業時は意匠設計を中心としたが、前社長は大型物流店の北海道進出を契機に事業の方向性を転換した。用地の準備から着手し、最適なテナントの誘致、事業収支を考慮した開発計画、投資家やリース会社への引き渡しまで一貫したスキームを作った。これによりイオンやケーズデンキ、ツルハドラッグといった大手物販店の物件を請け負うことができた。

事業収支が合わなければ立ち行かない民間事業だからこそ、シンプルがつかうコストが上らない設計を念頭に置いている。オーナーの要望を聞いた土地のポテンシャルをすぐに見いだし、どのような規模感の建物を建てられるか提案する。最短で打ち合わせ中に高精度の図面を提示するようにしている。これこそが、設計と不動産の両輪で事業展開してきた当社の強みとみている。

―注力する事業は。コロナ禍以降のEC(電子商取引)市場の拡大といったニーズを受けて、最新の物流システムに対応した倉庫や配送センターの計画に携われるよう力を入れている。リーシングから関わり、事業性の高い計画の提案を目指す。近年では3階建て、延べ6万6000平方メートルを超えるような物流倉庫の設計を担当する機会も得られた。「マキタ設計事務所といえは店舗」というイメージが強いが、どんな建築物も設計できる。

ラピダス(本社・東京)の千歳進出によつて、物流施設や工場などの立地が増えれば、さらに需要が高まるとみられる。本州企業の物件は、寒冷地仕様への対応などを道内企業が担うニーズもある。ウェブで打ち合わせといった場合への対応でもDX推進は重要な要素になる。

―今後の展望を。

都心部の再開発や屋内遊戯施設といったあまり手掛けてこなかった建築を設計する機会に恵まれたい。DXの推進に併せ、社員一人一人の専門性を高めることで、プロフェッショナルの集団という特長を持ちたい。